

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520823

研究課題名(和文) ワークライフバランスをめぐる政策と実践の人類学的研究：オランダの事例から

研究課題名(英文) Anthropological study of work-life balance policies and practices: A case of the Netherlands

研究代表者

中谷 文美 (Nakatani, Ayami)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：90288697

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：オランダにおけるワーク・ライフ・バランス関連政策と人々の生活実践の相互作用を課題とする本研究で明らかになったのは、ライフステージの進行に応じて働き方を柔軟に変更し、正しいバランスのあり方を模索し続ける個人の選択が、個別のニーズに従って働き方の見直しを可能にする制度の存在によって支えられている現実である。

しかし、パートタイム労働を中心とする女性の就労拡大は、市場の要請やジェンダー平等達成に後押しされた政策転換を単純に反映したものではなく、産業構造の変化、夫婦間の性別分業に関する社会通念の変容、そして女性達自身にとっての望ましいライフコースの変化など多様な要因が働いた結果であると言える。

研究成果の概要(英文)：This study has aimed to explore the inter-relatedness between policies concerning the promotion of "work-life balance" and people's daily practices. A series of new labour legislations consequently narrowed the gap in rights, benefits and earnings between full-time and part-time work. Part-time employment has become the standard way of working for Dutch women, especially those with children, as a viable strategy to combine work and family.

The analysis of various surveys, policy documents as well as in-depth interviews with Dutch women and men revealed the fact that the current Dutch situation is not a simple outcome of so-called "work-life balance" policies or economic demands. Rather, the increase of women's entry into the labour market and their preferences for part-time contracts are the result of a complex interplay of changes in social values, economic situation, legislative measures as well as women's increasing aspirations for redefining their position in society.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：ジェンダー 社会政策 労働 オランダ ケア 生活時間

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究対象をめぐる先行研究

EU諸国の中でも比較的早い段階から「ワーク・ライフ・バランス」の実現につながる法整備に着手してきたオランダでは、既婚女性の労働市場進出が進み、それと同時に独身者や既婚男性の間にも多様な就労形態やライフコースの選択が見られるようになった。立ち遅れていた保育行政についても、1990年以降の政策転換により、新たな展開が見られる。

オランダ独特の労働政策の展開については、「ワークシェアリング」の先進事例という位置づけで、日本でも積極的に紹介されてきたほか、国外においても、オランダ人研究者を中心に、市民社会論 (J. Bussemaker et al. eds. 1998, I. Bleijenbergh 2004)、福祉国家論 (M. Kremer 2007)、女性労働政策論 (J.J. Schippers et al. eds. 1998, R. Crompton 2007) などの観点から研究の蓄積がある。これらの研究は、いずれも政策文書や統計資料の分析を駆使した興味深いものであるが、社会政策それ自体を研究対象とする性格上、そもそもオランダ社会において「仕事」や仕事と両立すべき「ライフ」の中身として重視される「ケア」がどのような概念であり、人びとはどのような「仕事」「ケア」のあり方を理想としているのか、相次ぐ政策転換は「仕事とケアの両立」をめぐる人びとの選択にどのような影響を及ぼしているのか、といった点に十分踏み込んではいえなかった。

(2) 申請時の研究動機・背景

本研究に先立つ研究プロジェクトにおいて、申請者は「ジェンダー視点による<仕事>の国際比較」という枠組みで、オランダにおける調査を開始し、主として女性のパートタイム労働に関する統計資料、政策文書、メディア報道などの資料を収集したほか、子育て中の高学歴ホワイトカラー女性を中心に

個別のインタビュー調査を実施した。そこで得られた結論は、現代オランダ人女性の働き方を規定する最も重要な要因が、公的保育にどの程度子どもを委ねるか、親族ネットワークをどの程度活用できるか、などケアの方法の選択にあるというものであった。

そこで本研究では、上記研究の枠内で着手した調査内容をさらに発展させることを企図した。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者がこれまで進めてきた「仕事の人類学」という研究テーマに即しながら、オランダを事例とし、「ワーク・ライフ・バランス」をめぐる政策と人びとの実践の間にある相互作用を文化人類学的手法を用いて明らかにすることを目的とする。

特に「仕事とケアの両立」という側面に注目し、(1)労働政策、社会福祉政策等「仕事とケアの両立」にかかわる政策の内容・歴史の変遷とその背景、(2)「仕事」「ケア」をめぐる文化的意味づけと世代間・男女間の分配のあり方をめぐる変化、(3)異なる世代・男女のライフスタイル選択に対する時代ごとの政策の影響の3点を調査課題とする。

3. 研究の方法

具体的には上記調査課題に即した研究設問に答えるため、主として文献収集(関連先行研究、統計資料、政策文書を含む)とインタビュー調査および参与観察を実施する。

(1)「仕事とケアの両立」関連政策の整理
関連文献や政策文書の収集・分析によって、雇用、社会保障、公的保育などに関する諸政策の具体的内容を整理するとともに、その歴史の変遷や主要な転換点における背景要因を確認する。

(2)「仕事」「ケア」をめぐる文化的意味づけと世代間・男女間の分配のあり方をめぐる変化
歴史的文献、各種統計調査および個別インタ

ビュー調査に基づき、オランダ社会における「仕事」および「ケア」がどのような概念として文化的意味づけを与えられ、とりわけその両者の世代間・ジェンダー間での分配はどのように規範化されてきたか、という問題を、時代ごとの変化に注目しながら検討する。

(3) 異なる世代・男女のライフスタイル選択に対する時代ごとの政策の影響

「仕事とケアの両立」実現という課題のもとに矢継ぎ早に実施された1980年代以降の諸政策が、オランダ人男女のライフスタイル選択においてどのような影響を及ぼしてきたのかという問題を、異なる世代および男女を対象とする個別インタビュー調査により明らかにする。

4. 研究成果

日本で1990年代末からしばらく続いた「ワークシェアリング」論議の中で、多様就業促進型、つまりライフステージの進行に応じた家庭責任の遂行と就業の両立が可能になるような働き方のモデルを提供するとされたのがオランダであった。

歴史的に振り返ると、1950年代から1960年代前半にかけてのオランダでは「男性稼得者モデル」が社会を席巻し、強固な役割分業規範の下に、既婚女性の圧倒的多数が専業主婦化していたが、1970年代以降は家庭内の電化が進み、家事時間の短縮が可能になったことや、経済危機に対応する賃金抑制策の下で家計補助の必要性が増したことから、既婚女性の就労意欲が増大し、再就職する女性や、結婚・出産後も就労を継続する女性が急増した。1990年代以降は、パートタイム労働の正規化・均等処遇化や労働時間のさらなる柔軟化とともに、立ち遅れていた保育行政もようやく進展し、多くの女性にとって、パートタイムでの就労と家事・育児の両立はごく当たり前の選択となった。

現代のオランダにおいては、有償労働とい

う意味での「仕事」はあくまでも生活の一部であると認識される。一般の人々の日常生活は、仕事以外にも家族へのケア（子育て、介護など）、趣味、親族・友人との交流、ボランティア活動などさまざまな要素から成り立っており、仕事だけを神聖視する意識は男女ともに薄い。

各種統計調査、新聞や雑誌記事などの分析に加えて50人の男女を対象に実施したインタビューの結果から浮かび上がってきたのは、結婚、第1子誕生、第2子以降の誕生、子の就学などといったライフステージの変化に応じて働き方（職場、通勤時間、労働時間など）を柔軟に変更しつつ、自分にとっての正しいバランスのあり方を模索し続ける個人の姿であった。また、そうした個人の選択を後押ししてきたのが、パートタイムとフルタイムの相互転換を保障する法律に加え、一時的な就労時間調整を可能にする育児休暇（2004年時点で男性雇用者の18%が取得）、フルタイム就労時間を週4日に配分することを認める職場慣行など、個別のニーズに従って働き方の見直しが可能である制度の存在である。

このような状況を生み出した背景には、女性の就労拡大を必要とする市場の要請により、税制や社会保障政策において、「男性稼得者モデル」を前提とする制度設計の見直しが提唱されたという要因が働いている。しかし、単に女性を労働市場に引き出すだけでなく、有償労働と無償労働の偏った配分を是正するべきであるという主張が展開され、政府の審議会も「コンビネーション・シナリオ」、つまり労働時間の柔軟化、社会保障制度の変更、公的ケア供給の拡大、ケア労働の部分的な外注化といった政策パッケージを提案した。

現実には今なお女性のほうが無償労働を担う比率は高く、またパートタイム労働の選択も女性に偏っている状態が持続している。昇進意欲を含め、生活総体の中で仕事が占め

る比重や意味も男女間で異なる傾向が強い。とはいえ、パートタイム就労の拡大は、多様なニーズに基づく多様なワークスタイルが常に職場に混在する状況を生み出した点に大きな意義が認められる。フルタイム契約ではあっても、週末以外に週1日を在宅日とし、子どものケアを引き受ける男性も増えてきた。

男女を問わず、生活の中のさまざまな要素をいかに自分の望むバランスで組み合わせ、両立させるかという課題が重要であり、さらにその多様な組み合わせのあり方は、常に修正可能であるという認識が広がっている点が現代オランダ社会の特徴であるといえる。

だが同時に強調する必要があるのは、パートタイム労働を中心とする女性の就労拡大は、単純に政策の変化を反映したのではなく、産業構造の転換、性別分業やケア役割をめぐる社会通念の変容、女性たち自身が望ましいととらえるライフコースの変化など、多様な要因が絡み合った結果であるという点である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

中谷文美「『組み合わせ』の技法——オランダにおけるワーク・ライフ・バランスの実践——」『ヨーロッパにおける多民族共存とEU』神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター、56 - 63 頁、2012 年 3 月。

Nakatani, Ayami "Housewives' work and/or mothers' work? The changing positions of housework in Dutch society," *Journal of Intimate and Public Spheres*, vol.1 Issue 1, pp.75-91, December 2011.

中谷文美「『組み合わせの技法』オランダ流ワークライフバランスとは」『民博通信』133 号、28-29 頁、2011 年。

Nakatani, Ayami "From housewives to 'combining women': Part-time work, motherhood, and emancipation in the Netherlands", 『日蘭学会会誌』第 34 巻第 1 号、1-21 頁、2010 年 3 月。

〔学会発表〕(計 3 件)

Nakatani, Ayami "Four days at home,

three days at a day-care": The gendered meaning of time and place in the Dutch ways of reconciling work and family", The 17th World Congress of IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), 6 August, 2013, University of Manchester, U.K.

招待講演「『組み合わせ』の技法—オランダ社会におけるワークライフバランスの実践」神戸大学大学院国際文化研究科、異文化研究交流センター主催研究セミナー、於・神戸大学、2012 年 1 月 24 日。

「仕事とケアの両立という生き方—オランダ人のワークライフバランス」国立民族学博物館共同研究「ジェンダー視点による『仕事』の文化人類学的研究」於・国立民族学博物館、2010 年 12 月 11 日。

〔図書〕(計 2 件)

単著 『働くことと生きること オランダ流ワーク・ライフ・バランス』世界思想社(入稿済)2014 年度内刊行予定。

分担執筆 落合恵美子・赤枝香奈子編 『アジア女性と親密性の労働』(執筆部分: 中谷文美「主婦の仕事・母の仕事—オランダ社会における家事の文化とその変容」55 - 80 頁) 京都大学出版会、2012 年 3 月。

〔産業財産権〕
○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷 文美 (NAKATANI, Ayami)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号: 90288697